

# 『イベント・MICE関係者のための 使いやすいサステナビリティガイドブック』の ご紹介

一般社団法人 日本イベント産業振興協会  
サステナビリティ委員会  
委員長 越川 延明<sup>◇</sup>

一般社団法人 日本電機工業会（JEMA）展博委員会が参加している展示会関連団体連絡会<sup>\*1</sup>の定例会合（2024年11月14日開催）において、『イベント・MICE関係者のための 使いやすいサステナビリティガイドブックのご紹介』と題した特別報告会が開催されたので、その概要をご紹介します。

読者におかれましては、展示会業界に関係するしないにかかわらず、これまでに掲載した展示会関連記事同様に、各所で行事やイベント等を企画・実施する際の参考にしていただければ幸いです。

本稿は、事務局が書き起こした報告内容を基にスピーカーが加筆し、ご寄稿いただいたものである。

\* 1 経済産業省、独立行政法人 日本貿易振興機構（ジェトロ）、一般社団法人 日本展示会協会、一般社団法人 日本イベント産業振興協会（JACE）、JEMA 展博委員会の5機関にて構成

## 1. はじめに

一般社団法人 日本イベント産業振興協会が参画するイベント・MICE サステナブル運営コンソーシアム<sup>\*2</sup>は2024年9月20日、『イベント・MICE関係者のための使いやすいサステナビリティガイドブック』を発行した。これは、サステナビリティに対する関心や有用性についての声が高まる中で、同コンソーシアムに所属する機関がそれぞれ別個に作成するのではなく、一本化した方が適切であろうとの結論に達した結果として、とりまとめたものである。来年開催され、別名「SDGs万博」とも言われている大阪・関西万博を契機として、業界全体のサステナビリティに関するボトムアップやレベルアップを目指すために、レガシーとして残せるものは何かのかとの認識の下、策定するに至ったのである。本稿ではその概要を紹介する。

\* 2 イベント・MICE サステナブル運営コンソーシアム：公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会、大阪観光局、一般社団法人 日本コンベンション協会、一般社団法人 日本ディスプレイ業団体連合会、一般社団法人 日本展示会協会、一般社団法人 日本イベント産業振興協会の6団体で構成

本ガイドブック策定により目指す方向性は図1に示すとおりである。

## 2. ガイドブックの活用方法

### 2.1 本ガイドブックの位置付け

本ガイドブックをあえてガイドラインとは位置付けなかったのには理由がある。

もし、ガイドラインと位置付けてしまうと、

- ①一定の基準を設けたとの印象がある
- ②企業の規模や形式によって取り組める活動が異なっているため、受け入れられにくい
- ③既に取り組んでいる企業はもちろん、これから取り組む企業によって目標設定がかなり変わってくるので、実態とかけ離れた内容になってしまう

従って、一律の基準を設けるのではなく、イベントを作っていく上でサステナビリティに配慮できる場面をリストアップするにとどめることとした。そして活用していく方の成長目標に資するよう工夫した。

◇ 株式会社 セレスポ 執行役員

## 2.2 ガイドブックにおいて特に注力するテーマ

サステナビリティが包含する領域は幅広く、イベントの業務は多岐にわたる。本ガイドブックでは、多くのイベント主催者・制作者が取り組みをイメージしやすくするために、多くのイベントで行われる業務領域において、

関わりの強いテーマとして「環境（脱炭素、資源循環）、人権（労働安全衛生、DE&I\*<sup>3</sup>）、社会効果」を設定した（図2）。

\*3 DE&I：ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（多様性・公平性・包括性の三つからなる概念）

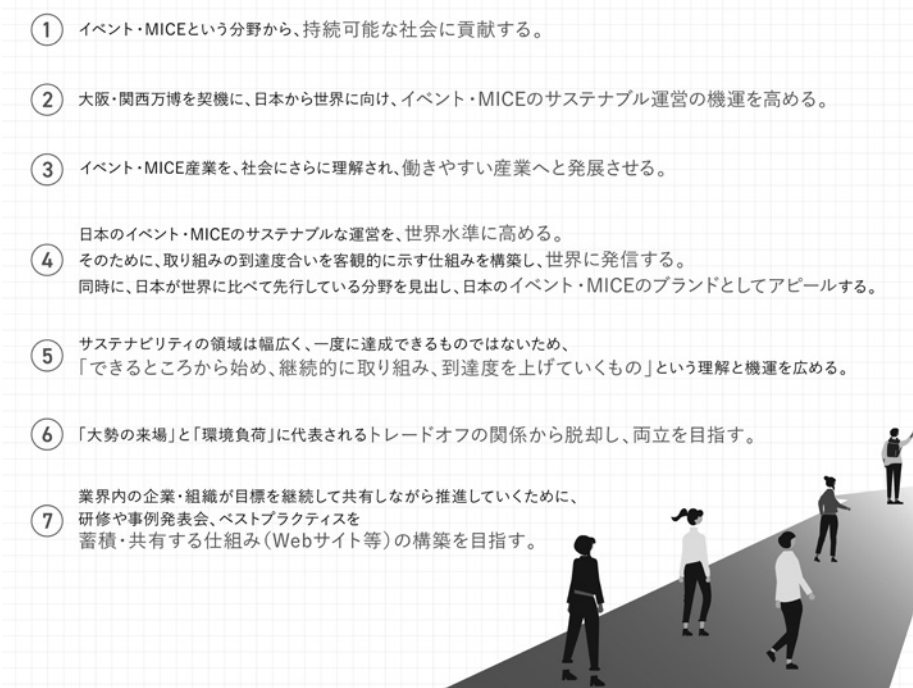


図1 本ガイドブック策定により目指す方向性

	環境		人権		社会効果
	脱炭素	資源循環	労働安全衛生	DE&I	
イベントとの関連性	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントの規模が大きくなると、参加者・来場者の移動に伴う温室効果ガス排出量は増えていきます。</li> <li>この状況に向き合うためにも、イベント制作全体を通じて、脱炭素への取り組みが必要です。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントという一時的な活動を行うために、大量の資機材・備品を使用し、廃棄物が発生します。</li> <li>3Rに取り組み、資機材・備品を繰り返し活用するなどして、廃棄物の削減・適正な処理を行う必要があります。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントでは労働環境や背景の異なる事業者や従事者が集まり、業務を進めていくこととなります。</li> <li>従事者の安全を守り、安心して働ける環境を整えていくために、共通のルールを明確にすることが必要です。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントには、関係者・制作者はもちろんのこと、参加者・来場者にもさまざまな方が訪れます。</li> <li>より多くの方が参加でき、充実した体験のできるイベントにしていくために、DE&amp;Iの推進が必要です。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントを契機としてさまざまな取り組みが行われ、その取り組みが社会に広まっていきます。</li> <li>主催者だけでなく、より多くのステークホルダーが参画し、レガシーを共創することが求められます。</li> </ul>
社会的潮流	<p>2015年パリ協定合意 世界的な平均気温の上昇を産業革命以前に比べて1.5℃以内に抑える努力を追求する。</p> <p>2019年気候変動サミット 77か国が「2050年までに温室効果ガス排出を実質ゼロ」を表明</p> <p>2020年「2050カーボンニュートラル宣言」(日本政府)</p> <p>2022年 ネイチャーポジティブに関する国際目標が決まる(COP15) 2030年までにネイチャーポジティブ(自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる)を実現する。</p>	<p>資源消費量の増大 2060年の世界の資源消費量は2倍以上に増加すると推計されている。</p> <p>2020年「循環経済ビジョン2020」発表(経済産業省)</p> <p>2023年「成長志向型の資源自律経済戦略」発表(経済産業省)</p>	<p>2014年「VISION ZERO」提唱・採択(世界労働安全衛生会議) 安全、健康、ウェルビーイングの視点からゼロアクシデントを目指す。</p> <p>2020年「ビジネスと人権に関するナショナルアクションプラン」公表(日本政府)</p>	<p>グローバル化の進展 グローバル化の流れは強まっています。国際競争力を高めるためには、多様な価値観に対応することが必要です。</p> <p>2023年LGBT理解増進法案成立</p> <p>2024年 障害者差別解消法 改正</p>	<p>予測不可能な時代 VUCA (Volatility: 変動性、Uncertainty: 不確実性、Complexity: 複雑性、Ambiguity: 曖昧性)と呼ばれる先行きが読めず、変化も早く、大きく変わっている時代では、多様な立場の者が対話を通じて、新たな価値を共に創り上げていくことが必要です。</p>

図2 ガイドブックにおいて特に注力するテーマ

### 3. サステナビリティへのアプローチ

#### 3. 1 サステナビリティに取り組むプロセス (PDCA サイクル)

サステナビリティへの取り組みは「ここまでやればいい」というものではないし、1回のイベントで完結するものでもない。イベントのマネジメントサイクルに合わせてPDCAサイクルを回しながら、サステナビリティへの取り組みを増やし、成果を大きくしていくことが大切である。

- 〈ポイント 1〉 現実的な計画を立てる
- 〈ポイント 2〉 数値化する
- 〈ポイント 3〉 定期的に見直す

#### 3. 2 サステナビリティに取り組む上での留意点

サステナビリティへの取り組みを進める上で積極的に情報発信していくことは有効であるが、ウォッシュ\*4は回避しなければならない。そのためのポイントを図3に示す。

\*4 ウォッシュ：実態が伴わないにもかかわらず、社会的によりよいことをしているように見せること

### 4. サステナビリティへの取り組み

#### 4. 1 全体方針

イベントの方向性を定め一貫性をもって取り組むためには、全体方針を明確に定め、関係者で共有していくことが必要である。サステナビリティに取り組む上で向き合っていく課題・テーマは幅広く、それぞれが影響し合っ

ているので、全体方針を決めるプロセスには、多様な属性・価値観の人を加えていくことが望まれる。

#### 目標

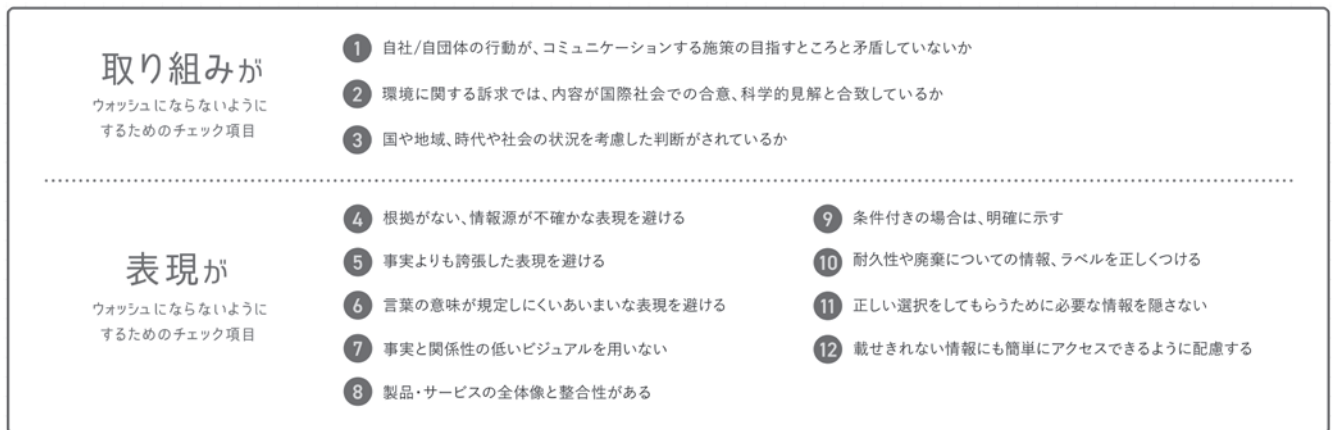
- ・サステナビリティに取り組むことの  
意義が共通認識されている
- ・サステナビリティに取り組む  
領域が設定されている
- ・サステナビリティに取り組む  
内部体制が整えられている

#### 4. 2 企画・設計デザイン

企画・設計デザインの段階では、イベントの構成要素を一つ一つ決めていくことになる。イベントには多様な方が参加するので、会場の設計や使い方、プログラムの内容・演出・表現などを決めていく際には、関係者だけで決めるのではなく、配慮が必要な当事者や取り組みテーマの有識者の意見を取り入れていくことで、よりよいイベントをつくることができる。

#### 目標

- ・環境や人権に配慮したイベントを開催するための枠組みがつけられている（開催状況）
- ・より多くの人に参加でき、楽しむことができるように企画されている（企画内容）
- ・サステナビリティの実践をより高められる制作体制が整えられている（制作体制）



参考「サステナビリティ・コミュニケーションガイド2023」電通グループ

図3 ウォッシュを回避するためのポイント

- ・イベントを契機として多くの社会効果を生み出すために、多様な人が参画できる環境が整えられている（外部連携）

#### 4. 3 設計・施工（撤去含む）

労働人口の減少に伴う物流機能の低下、設営・施工要員の不足などが大きな問題となっている。

設営・施工（撤去含む）段階において、全体最適で効率化を図ることは、当該分野における労働環境を改善していくだけでなく、環境負荷の低減にもつながる。

##### 目標

- ・輸送に際して、CO<sub>2</sub> 排出量の削減に向けて取り組んでいる（開催状況）
- ・サプライヤーの労働安全衛生環境が適切に保たれている（労働時間、労働環境）
- ・廃棄物の削減に取り組み、産業廃棄物が適正に処理されている（撤去）

#### 4. 4 運営

イベント開催中の体験が参加者の意識や行動の変化を促す。サステナビリティへの取り組みについて、プログラムをはじめとする会場内での体験を通して伝えていくことが社会的効果の波及につながる。

また、より多くの方がイベントを安全・安心・快適に過ごすことで、イベントの持つ社会的な効果は向上する。

イベントに参加する方の多様なニーズに対応し、さまざまな方が参加しやすく、心地よく楽しめるイベントとして運営していくことが重要である。

##### 目標

- ・企画・設計デザインで計画された環境や人権に配慮した運営が実践されている
- ・関係者・参加者・来場者等のサステナビリティに対する理解・協力が得られている
- ・開催期間中の CO<sub>2</sub> 排出量削減や廃棄物の抑制・資源の再利用に取り組んでいる
- ・多様な人が参加でき、楽しめる運営体制を整える
- ・運営スタッフの多様性や労働環境に配慮された運営がされている

#### 4. 5 会期終了後・評価

サステナビリティへの取り組みに終わりはなく。取り組みを1回のイベントで終わらせず、次回のイベント、関連するイベントなどを通じて取り組みを拡大・向上させていくことが求められる。サステナビリティへの取り組みを測定・評価し、改善点を抽出し、継続的な改善を実践していくことが重要である。

##### 目標

- ・サステナビリティの取り組みについて、客観的な評価を行う
- ・ステークホルダーとの対話を行い、改善につなげる

## 5. おわりに

本冊子は、一般社団法人 日本イベント産業振興協会（JACE）のウェブサイトに掲載した。詳細内容についてはこちらにアクセスの上、閲覧願いたい。

<https://www.jace.or.jp/news/20240920/>

